繪本豐臣勲功記

四編 九

へ遠13
2209
39

特
へ遠13
2209
巻 39

繪本豊臣勲功記四編巻之九

目録

粉谷兄弟守信義別他自
屬二木城攻
秀吉烈攻野口城玄蕃奈
屬嘉明由緒

羽柴秀吉與毛利家對陣

屬光秀偏執

毛利家與羽柴戮熊見川

屬福島大勇

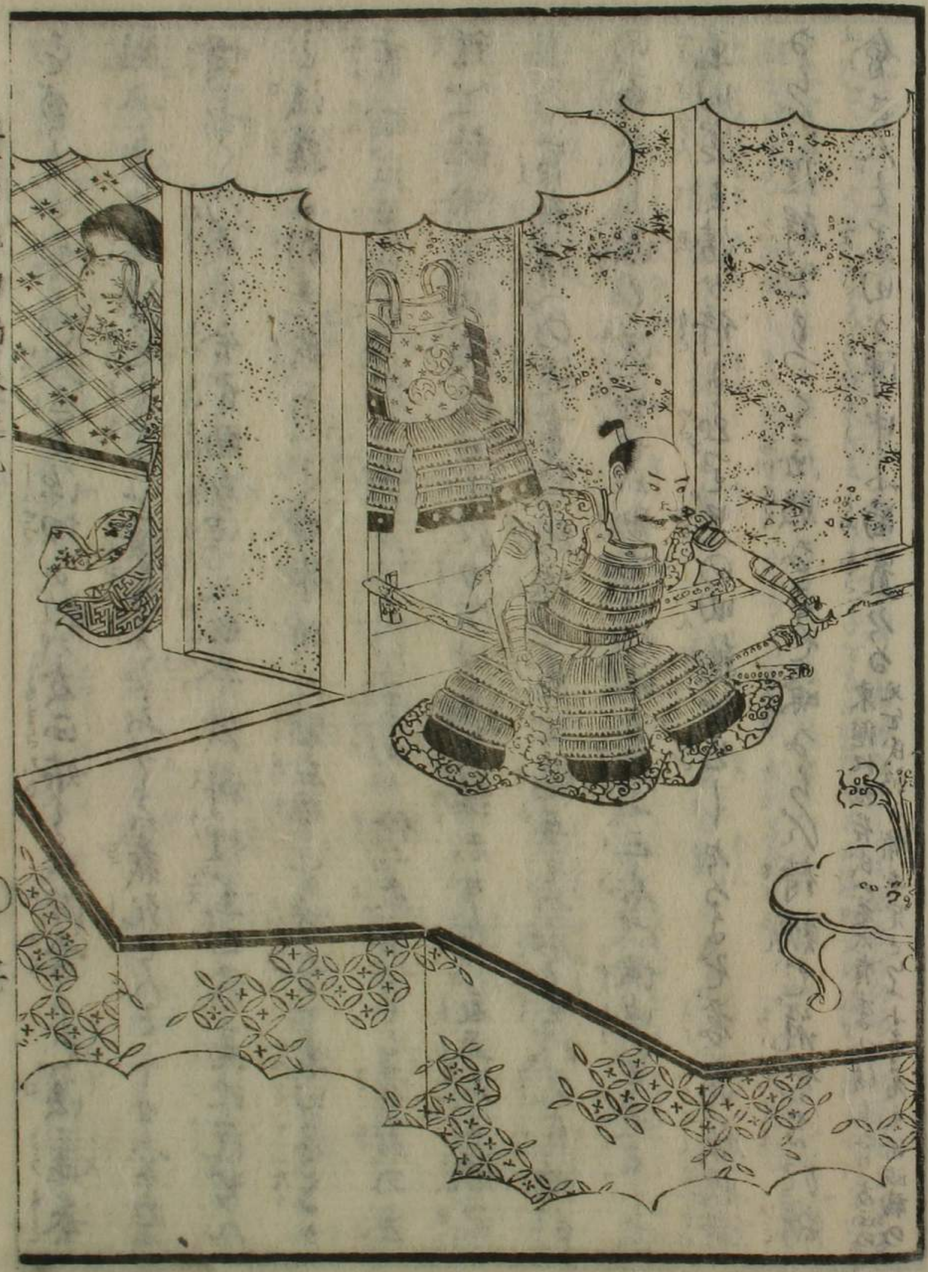
繪本豊臣勲功記四編卷之九

江戸　八功舍　德水刪補

粉谷兄弟守信義別他自屬三木城攻

丈夫涙をはらはらと。離別の間ふ濕げなと。意強くも陸奥蒙ハ謂放つといへども。今遠黒田と後藤ゞ離別ハいとゞ涙なかりざらん。官兵清將監に別まつる後。詫し置しる基太郎を見るふつけても最悲しく。我子と共ふ養育して。兄弟の如く思ひけり。遠基太郎後ふ又兵清基次といふ備又後藤將監ハ。三木城中へ立帰り。密ふ粉谷に射面し黒田が書翰を把出し。自身ハ儀事結りなるとて。兵清も強盛嘆ゝ。黒田が書翰を開き閲るふ。すゞ兵清ふ出城せよと記し。く後。備心服ふ慙ぢバ。舍弟助右清門を出し。家名相續いるさ

粕谷
助右衛門
兄の諫ふ
聽く黒田が
許へ送らる



を賞し。とかもひ入らるる余切なれば。友正姉〻く流吟して。後藤基
國ふうち傳ひ。足下一ゐを退けく。こづうらの義死せんとしのふを聚
慣ふく乃夫も。舎弟助右衛つぐ助命成料理。黒田孝高に託せん
と後藤よ別き結ふしく后。即時に助右衛つて承出し。黒田孝高ぐ
書翰成見せ。是非を論ぜ〻。速に黒田が許へ来るべしと孝義の道
理を説諭し。只顧諫めしにかゆけよ兼続志りまべ。友正大の倹脱
しく。官兵衛への返書成記得。こまを遁ちしつ今生は兄弟離別
の盃かし潔く送せ〻べ助右衛つ泪と共ふ。こ本は城中を退きして。
黒田官兵衛が許よ至つ兄の回翰を出しくるるぞ。孝高感涙斜
ならず理解をもつく屈服なさせ諫めらるべ待歎て流涙ちして謝
會さんと黒田が陣中ふ局置くる東徳に物語氏ハ後太有季の後流なり友正の
父を氏綱少輔友定とし小寺孝兵衛清政職の

妹を要く妻とする一友正成産子共後ゆ兵衛ありて諸侯なせしが同国志村の伝某に奉仕し男子
一人をもとりたるがよく良夫死をしくまべ一子を友正に託を友正達附父の後をお継してけりける
ゆ兵衛実母の子をもとこしも拝せ〻流ハ語まもど同腹なれば分ケ
随分涙責るく扶助し育て相応を名のせうり今は助右衛武利是ケ
長治ハ一族旗下の諸士を集めく。謀反を起を顕しくまべ四氏大ふ驚
江嘩ぎ東西南北に奔走し。結るふ邪策奏者ハ。先日大内山城守こ完
肥前守が挙止をころ得ぐくおりひしに。急地謀反のトの一国ぐれば
ふ速別所孫右衛つ重棟を峰出し。紙ふこれを鞫問せんと同頼に
まうしなる也。長治賀相謀反して。敵対の意成顕せり。意頗いか
なる事ふやと訊に重棟答惑るし為て知らざる旨を答ふ秀吉所
て四中ふ。結ふくんとハ頑く知きども。衆人の疑をもちさんため。
故意怒きる氣色をし。威儀を革め重棟ふ向ひ君ふも。こうし
殆しなり。汝ハ現在長治が叔父にして。山城守が弟なるぞや。時さ一族門ふもち

僧集めて事を謀る歟。汝何とか見る。織田家と縁合不意を整へんとするものなるべし。とかく奮せて罵りけれども。孫右衛門とても恐れず。小兵衛全く応ぜざる。僧擬を棄て舒んと宜辛新公方御上洛の義。御兵衛が自弊を率ひ参るに臨て。山城ちこれ拒む。妨なしといへども。強く参向つかまつり委公方家に忠を竭し。信長公へ切に達る。絶外交の知るところなり夫よりこの兄と不快なりて。諸事小兵へ事を繕ぜば。これ彼もて慮に小兵へ教度織田殿ふ。御懇の意を蒙れども。賀相多て遠事なり。これを始て遠遺の様及も改全ならんことを。因て小兵へ。些とも知らせず今は既ふ兄弟縁者の道絶ぬ。勅力法ならんる故あるべし。一端織田家へ属せ。小兵。今更分命か

むやうなり。疑ひ多く速ふ。遠前を知るべ。些も恨とまるまじと織信の偽を見るにて。秀吉忽地氣色顕らみ。足下心伏寧ト思へ。始の如く稟せん。諸士は疑惑を解んがためなり。足下の微心頃てよりて。我〻くこれを空知せり。大内賀相今既ふ心を決して軍城ぬきべ。翻さべき心いなかるべ。然し一端の禮義なり。足下書翰伏記得て。懇切ふ宥めまうされよ。其上ふくも国容なくば止る域得ず伝伏せんと。統和ちの命を受。重棟書翰を業記さく。賀相が方一遣〻なるべども。更に回答もなりしべ。二度まで使者を走たりしふ。漸く一対の折翰伏報ば。是元利家ハ他年の好。其約束伏変ること。武士の恥ぶき有り。と心情伏わど言へ〻れば。遠前をもて相柴に告るふ。今ハとや是非もなし。中国出馬を始く止め。まづ當敵を征

伐とゝ〳〵と同年三月廿九日。二万餘人を引率し。三木の城へ推進る抑三木町の東なる。釜山の城と号せし。前面に大河奔激して。白浪平日に崖を奏。後面は峭くたる高山聳へ。白雲斜に腰伐遶る。最も堅固の山城なり。累世恩顧の兵士軍。八千餘人對敵守て。全是必死と覚期して。進兵来るゝ防ゞ人。鉄炮矢石を雨注し。巻伐拉く結蒐さく。加之神吉。志敦漢河。高砂。野口湯吉の城くへ。歌倚が城三木を攻めば八方より一時に出く。敵の後背を毆ぐさよ。堅く謀り合せて。滞る防禦の術なるもせよ。秀吉何をか怖るゝ。兵地〳〵と推進なる。防禦の備揉城地の虚實伐よく沉視し。諸軍を制し退軍を爲さ指揮を傳ふ。諸士をも大に誘る伐秀吉暮び指揮をなし二方の兵伐左右に分。舍弟小一郎秀長伐を陣として秀吉づから

距後とす。駛卒に令して。各〳〵を放火なさ焔火に絡き車艶とゝふ隊伍に。操退ふ。たまぞれる。足退殿を防ぐんためなり。城中進兵の退を見て。退歌せんと計ども。隙く伍く厳重にして賸距後ふ虚隙なを。徒〳〵睡めて退るせう。秀吉雖なく帰軍志けを。諸士緻大に訝怪〳〵。いかなれば退陣〳〵をゝ。と問を秀吉示して曰。歌進来〳〵防ぐんと勇氣を含〳〵城兵何猛威今猶壮なる。況や要嶮堅固の城地卒尓に攻るゝ。日隙経く攻るゝ。歌の統氣大に減ぜん。時節伐待て彼城を。攻陷さんこと易し。然ども急に攻るに及ぶべ。然〳〵なるゝ思起する。諸士の勇氣伐懸まさんため。仏堡を攻て三木勢の。統氣を拉ぐ爲なりのをと黒田孝高別和重様に属て。東播の僧図を作らしめ。秀吉これを熟

覽して。地の理と往行の遠近ハ秀吉攻進る進途をぜられぬ

秀吉烈攻野口城兵降參屬嘉明由緒

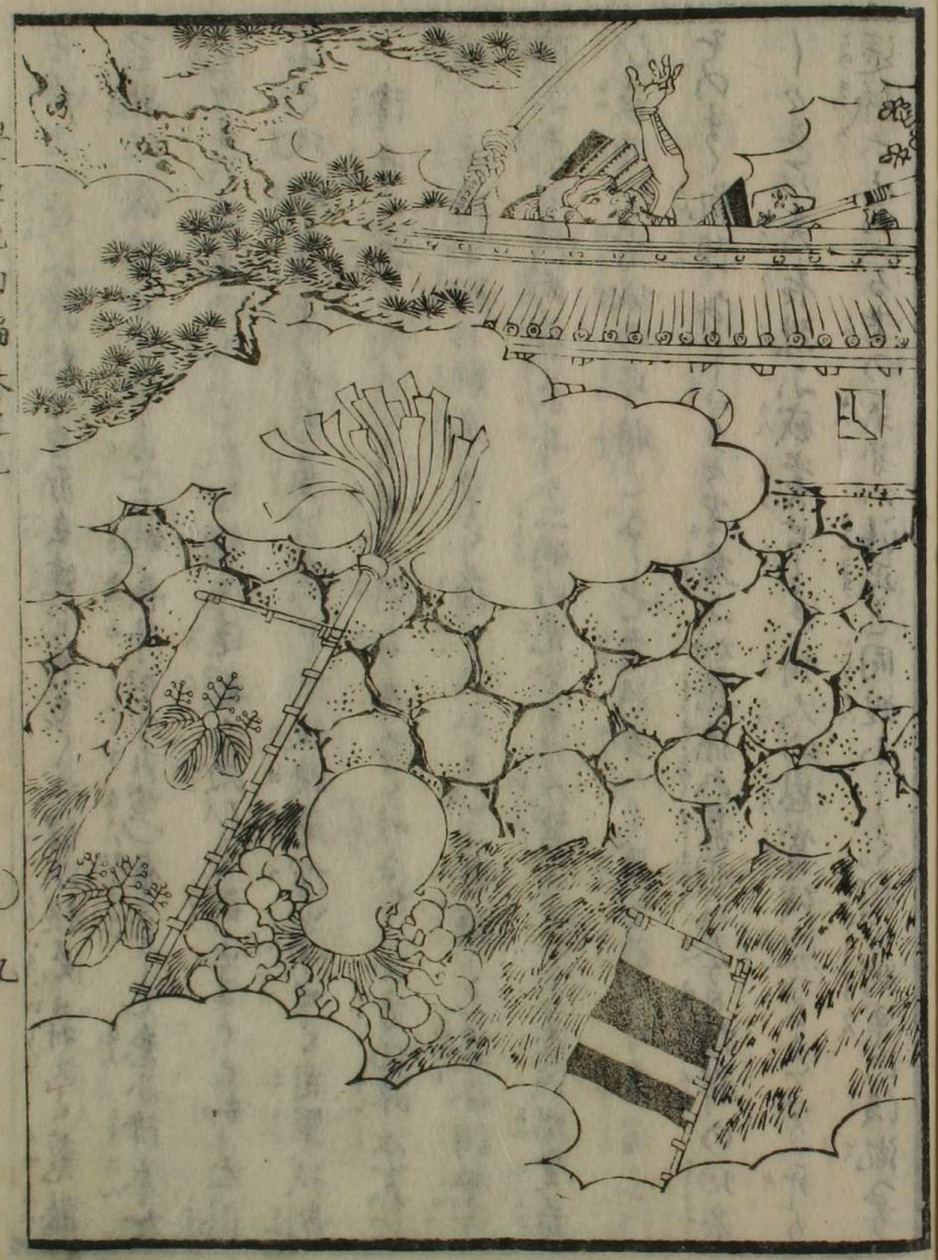
秋月氏政を全ふされバ。氏穀皆入と管子に謂ふ。軍も又然ふ。今三木城の援助たる。仍城を攻るといへども。自軍を堅固ふせぐんバ。ゆるゝと。秀吉思回を招いくいつゆう。方便國中ハ歌ふして。合戦せんとかりふふ。根本の本陣を。定めむんバ。ゆゝ。此地拓吉の館ハ便理宜しゆゝ。要崖便宜の地を料理ふ。佈西那書寫山ハ國の中央にして。山ゐる。最も奇絶の要崖なり。四方ハ軍馬ハ進むるに究竟の地とおがゆる。足下ハ搗麿の國縣なり。よく考へく從ら考よとまうもハ秀吉思惟して。かもたゞ掌を撲他と拍。小原多年中國ふ住。毋仮同伐ふ泥酒して。山門の地理を辯ドるゞ書寫山ハもて本陣と。なさ蒼さ心の屬さりもこそ。君ふも又陳うり久を。命の如く彼山へ本陣を搬しまふ。然し別使ハ遣さきさ人うり天ゐる也に登山して。僧徒を安逸なさしめ。慰懇勤の使者ふ及ぶ書寫の僧徒ハ別所方ふ與力ふ。同ハ純登り。本陣を居ゐにぞる。傍實ふ。ひと同意し印時ふ書寫ハ純登り。本陣を居ゐにぞる。傍傍大ふ驚嘆ふし。右奇左走して散乱しゐる。秀吉諸軍ふ令ハ出して。礼妨雑籍を停止なさしめ。老僧を呼く懇切ふ。害心なくよしを稱嘆し。安逸なさしめ然しく后。黄金百兩を一山ふ懶施し。仁慈ハ頭しゐ。僧徒ハ大ふ歓び合。感ト敬ひ待歎ゐ。然ふ。思回進ニ出。當國多く歌ふとゝ。切をに之案もあゝ称ど。一人の裏傑あ。倘合戦ふ及び。自軍のためハ笑ふ。と拓傍ていゆう。

羽柴秀吉
地理を量て
陣を書寫山ふ
もつて

只今呼出し、まうさせ給ふ。御射面を孫六やと。猶石助右衛
門を使出。出所の由来を語るふぞ。秀吉猶石をとく招き。其骨法、我
覩くゆるふ。身の材大に猶徐至。骨太くして。飽まぐ巍めしく。大張
英雄の相ありなるゆえ。秀吉猶石が美相、賞美し。懇情を尽し
饗宴なし。手自酒元の太刀を賜ふ助右衛つその仁徳ふ感じ。羽柴が
しあふ八一命を惜まぐ忠義を場さんりのと。傾心もるこそ理なれ。秀吉
猶石の一臂、我得く。威勢まもく壮なるゆえ。然バ伊城を攻隔さん
とく。同年の夏四月三日。一万餘騎を引率し。書寫山中、我出馬し
て。長井四郎左衛つが籠守る。野口の城ふ推進せり。領く秀吉国
中の闘者ひとと我奈悟なし。敵城推後ふ除ふと。単縛急に推拉
城兵を苦しれば。大ふ驚く体なし。我筑前守懇しく指揮なし。

息をも次せず。之二之三ふ柔破らんと進んぞう。城将長井四郎尼
清つ。狭幸を励ま〳〵防戦ふ。されど。一ふに是らぬ小勢なれば防徒で
つくしる我。進退俗まもく傑氣を振ひ。射まども掛ども事とも
せず。楯小投着撃投んと。中にも加藤孫六嘉明ハ大勇不敵ふ壮士
ふく。猶剛姚ふ達〳〵。我ハ進ふ知〳〵巨漢の楯ふ投着ありなる
我ふく。孫六通服〳〵と走より。御免い〳〵御魁して一番柔我ふ
つくん。といふると早く波漢子が肩ふを拭右足揚さ上常に凡頭
踏蒐。飄流と楯へ跳ふと大音あげく。羽柴筑前ち秀吉の臣家。加藤
孫六嘉明。野口の城ふ一番柔ぞ。我とかもさん歌ゆ〳〵をうて我胴
の。鎧なる我我ふと楯の冠尊を馬とる。傑兵衛我六七人。首足を撃
〳〵新例を。秀吉下ふこれを視て孫六殿まる早績けと指揮を

野口の城攻ふ
加藤嘉明
一番乗の
高名



る声と一段に號起しる勇気達つともくと堤ふ提灯、牛耳くと蒐騰
つ既に敵味方ゝと見る間。長井四郎左衛門傘出して急ふ降参を
乞々まゝ進ぜの人これを悟さ遠朝ふ及びく辭を生ゝと知る風
ふく攻起る伐。秀吉思慮をめぐらして牧棲尾課を決せく自軍伐制
し降参を許したりしゝ勇士脇本意なく嘆みめぐら。四方の路攻を忘れ
退く。主將を殺め駄車まぐく蘇生のおもひふ雀躍して逃ふ明紫ゞ
陣ふ参る伐秀吉長井ゞ二個の児をもて人質としてこれ伐借受蔭
ひ長井を當城の守將とゝして京伐安んゝ軍を收めく書写山へ。
そのまゝ凱陣みゝしうゝ。義ふ加藤孫六嘉明ハ。今日接戦の功名
ゝゝまゝ秀吉殊ふ感賞せゝまゝ情大の恩賞伐既ゝらきてう升も
遠孫六といゝる者の系号い清正と同姓ふゝく。利仁將軍の後胤ゝり

しゝ。久ゝく民間ふ零落ゝ。歳初ふゝく父母伐失ひ。叔ハ越前長
浜ふ生長ゝ。十歳の時。江州ふ別ゝる長浜町の馬高賈。花輾當二と
いゝる者の家ふ年期の奉侯せる。十二の頃より膳太く。膂力ゝ大人の
十人も。遠ふ童ふ勝ること能ゝ。眼光完明星の像くいとみるれど行
壮威あるゝ。馬伐もつくあつゝたるふ。自由自立ふ牽遠ゝ。ふよ
ゝく遠巷那街ゝ馬徑郎ふゝく遣ゝ。孫六生來好む業に
く。當二が家伐出るやいなや。行屬伐當ゝハ山ゝ野まゝ
まれ足撥ふ信せ。馬にうち鞭征鞭。心身衛く疲ふかよゝハ賈ふ家
一徑ゝゆく。毎日ふ彰ゝて御御を練磨ゝ。遂ふ双の達人となる。
東西ふ年月を送るまゝ。今ハ十四歳の秋となるまゝり。今天ゝも数多
の馬を牽て。濃州岐阜の城中に到ゝ。織田家ゝこれを賈ひたるゞ。

加藤槍兵衛といふる者馬の善悪に精しくまへ。柴ふ相鑑を怙こゝる。こゝ所得ようと馬場ふ到る。係六が多く牽来つる。馬を一く熟視うち。枇杷馬の肥く繞しれ。七寸ばかりと。大張後足の逸物なるを稱讃する。槍兵衛所聞く。験ふ遠馬ハよく繞結めば。千里を馳る。能も走ぬべきなど。恐らくハ万き癖ありて。人ふ熟刻ふ。人の物の靈なりといふを。馬ハあろう獅子ふまれ虎ふまれ。人の絶ては繞結めんこと。何條難き譬やあるべき。武士の馬ハ討ふ出戦に功を遂んがためなり。憶後足ハ獲ふとも。暴馬なれバ遠遣ハ繞らんと徒しく虎ふ繋ぎ置。他の馬ふ繞く出戦ふ。倘戦死ふ及ばゞまつらべ。討めし馬の用ふ達まし。遠馬ハ少しといふを

いつゝも。小童侍さへ繞来ることを。是獣の人位ふ及たゞる不習なり。利や價を贖ふく。付めゆへ主人なり。いそう馬の随ゞざらんや。我遠馬さへ。朋輩同僚なりといへども。人の位をもく繞結め。所詮ふいきんと。牧馬の像く。躾にふ。る場の中に逸放ち。枝打を鞭とくたゞふ逆把。石ふに馨撞捆そ。身を離らせく顛流と繞結。ふ鞭繞を一遍ふ。足撞を懲して一聲叫。左右一度に拘るまへ二百歩ばかりの塀中代風ふ乗る虎豹の像く。沙煙を巻て六七遍。筆指あるを。責ゝれバ馬ハ額ふ汗を吹。疲果たる所見ふ。繞行随意自由なり。静ふ自適三度打歩し。京の東へ命起く。塘に啣せ牽ふるふ。絶まで繞める暴馬なりしが。恰も畜獲しるが如く。練熟として立たしへ。加藤槍兵衛をもゝめとく。見聲ふ。る緒士の

孫六嘉明岐阜城中へ到り暴馬を騎て馴す

門く舌を奮ふく驚歎し。大張元双の達者なり。と讃ずるに梶元清も。元人ならぬと思ひ〜ゑ牽来る馬を鬻せくのち孫六を自宅ふ招ぎいるる人のまゐやうと。執孫ふ孫六様底ゝう系圖一冊孫出し。ゑ〜ゑ梶兵清見〜く愕き。是ぞ〜〜我同流利仁将軍ふ苗裔にして。加茂の氏族なりなる。父母ハ猶いまもやと同氏苦〜くゐ系の。薄命なると仰淵のあ〜まし〜。女も軍まぐ若〜うしゑ。梶元清ん みなぐ感歎ゑ〜。来長時より清る大志ハ。大張勇士とゐる爲ゑ紀君 君とぞ。今天より自宅ふ止りて。兵道伝学び武士とゐり。姓名を九天に挙らきよと懇切ふ待歎くれば孫六大ふ歓躍ゐ〜。只頼梶元清を怙據ゐる。梶元清その年孫六を伴く。長演ふ新き。木下秀吉ふ附属〜くれば。秀吉殊ふ賞賞〜して。嬖便傾分の馬廐命ゐる

ゐ。富二ゐも即時ふ呼出せとく。孫六ゑ故立伝咱傍く黄金幾何てきふ賜へ。孫六を城中へ受取て。竹中半兵清を師とみさせ。軍術兵法伝練学ゐ。加茂虎之助清正。加茂作内元泰 梶元清弟 泰の一ゐと同姓ゐ 也。兄弟の如く親交〜ゐり。

羽柴秀吉與毛利家対陣 属光秀偏執

心是に決せざれば。天も模陵ゑ伝備とゐや。再び説。浮田和泉守直家ハ。去年攻加上月城ふ赴く。老黨わまる失ふのそう。羽柴ゑ一戦の奇計ふ碎うれ。ゐ〜〜卒ゐ〜二万ゑ千の大軍を。磨埃の像くふ斬散され。是を憾念ふかりといへども。自力をゆ内く再戦を ることゑ進ひ〜〜心を碎伝窺ひ立ゐるゑ。此頃上月城中に尼子勝久。山中幸盛俊。雲州寒人三百千人牢城ゐると聞え〜ゐ浮田直

家恩慮をめぐらし。尼子は毛利家の宿敵なり。秀吉も〻中國に攻投
とするのみなら〻。遠事を毛利家へ新たく二家の大軍を引き〻上
月の城を攻陥さば。秀吉かゝる法援さへさふ。毛利と雌雄を戰こ
しめ。勝負ふ據く方便をなさんと。運筭毒端より計を設け。急ぎ毛
利家へ使者を送りて。織田の先陣羽柴秀吉。今播州より下向して。
中國へ乱入せんとす。統中尼子勝久。統兵ちが魁軍となりて。上月の
城ふ射凝ち。出雲へ入らんと企い。二家進ふ御出馬あらば。主家先陣
城奉受。まず上月を攻陥し。尼子の根本を防絶なし。秀吉も茶ふ殿
て。播州西州をるともに。毛利の御領ふなさんこと。今遠晌と成ぬるなり。
快く御出馬さるべしと。東條りけまば毛利右る頭輝元。遠事いかゞと
後護る。吉川小早川ふ談ぜるとこ成ふ。浮田再び果馬をもく。別紙八

謀反を新とう。然らば其勇に乗やとく。同年二月廿八日。備中。備後。安
藝。周防。長門。出雲。伯耆。石見。隱岐。義等の軍勢八万五千。武威弘大の毛
利二家。一同出馬と聞え〻。浮田主家大ふ怒び今般こそは秀吉を。一
戰ふ追崩さんと服示なり。然いさるをなゞら統兵ちが晌ハ加勢
をたさんふ。信長より後援を〻。然れば其勢十四五万ふも
及ぶなるんが。毛利もこれにハ敗走せん。い河をふもせよ織田と毛利の。
存亡遠晌なる處なるべ。我ハ出陣さへかゝるべと虚病をうまく家居たる。
浮田七名清忠家。同信濃守。戸川肥前ち。長船紀伊ち。
岡越前ち。同刑部。浮田河内ち。明石左彈ち海を當發を。然わどふ四月
中旬。中國勢。上月境へ差陣せり。まず一番ハ吉川後河ち元春嫡ふ
治部少輔元長。二男繁沢言内少輔元氏。三男氏部少輔元信。同少

捕次郎元秋、元春の同少輔七郎元扇、同上総介元忠、山口新左衛門隆忠、三浦三郎左衛門為清、同掃部助隆重、久加、南条伯耆守元次、小鴨左衛門枚原攘磨守成重、三刀屋彈正左衛門久知、元清俊、其勢二万七千餘人、二番ハ小早川左衛門佐隆景、穂井田伊豫守元清、浅野弾正の天野六郎左衛門元政、宍戸備前守隆家、これハ属さる所なり、三番ハ宇喜多秀家、平賀六郎左衛門元祐、清水長左衛門長治、上原右衛門尉元助俊、其勢二万八千餘人、備又紅梅の門くハ村上八郎左衛門義重、栗屋内蔵助元宣、野嶋大和守武俊、浦新兵衛宗勝俊、諸国の海賊一万五千餘人を駆集め、大船七百有餘艘、とを組ひ組ひ撐起く、播磨灘室那波、坂越に引ひかへ、海上ハ陸ぐ警固せり、然るハ大将輝元ハ二万五千の諸勢を率し、城中より出張ゆ、若ハ急しく進退せんとそ、此外浮田の一万五千餘加ふる時ハ、總勢都合十一万餘騎、ほ〳〵見へ〳〵ゆ、然るハ右ハ小早川、浮田二家の諸軍勢七万餘騎ハ、陸路餘発程し、不日ハ上月へ推進て、城を圍むこと疎く輪く、日も及ぎる大軍なり、まつ城中一軍威をりて、初しめんとそ八方一度ハ減を喫と挙こうし、久山林に海忽地ハ崩をやさると怪しまる、洛る大軍に圍まれ、ゆ〳〵ハ潟を山中素之助大勇悍智の豪傑なれバ、些も怖ず氣色なく、倹ハ怖しや主家の怨敵、毛利の大軍を引受て、軍さること疾びゆ、と跳揚て、後起、防禦の準備かこうなく、警固ハ接ひゆ、待蒐たり、進軍ハ城の西南なる、猿山ハ陣を居、文く城ハ推進せ、攻起ゆる後山中孝盛と川〳〵四方ハ地遠、際際なく指揮後傳へ近ぢく、敵ハ大床大石陣さ

る歟ハ施矣をりけく。惡しく防戦なしくるかどふ進兵をく損を
るけそ。攻陷まべきやうるなきバ。右門元春軍慮を廻らし。漸く攻んと
と成工夫し。諸勢ふ指揮して まづ高倉山（依用郡上月の西南二流の河を隔の嶺連ふ俗）
前の軍勢一万五千陣所を嚴重に構へさせ。其次の小高地山ハふ
早川隆景二万八千餘続にく陣成取る。備又枝原攝磨守又ふ。右
門方の魁隊として。遠山下ふ陣を居。小鴨左衛門佐山に新左衛門佐
次所ふ陣を列ねる。背面の山は絶頂ふ。右門元春父子偕ふ陣
とし〳〵く巍〳〵然こう。各嶮に隣。渓ふ據。澤林池塘の地を理る順し。
然も總陣の四隣ふハ。土塁成るくしたりく絶そ。麻角木をけく
結繞し。岩の像く構へたり。是原上月の一城を。怖きく成せる事
をしば。皆秀吉成防ぐんとるなり。實に名將ハ戦をして歟を恐

怖なさしむとや。羽柴秀吉數年の戦功智略天下ふ著く聞て。
いまく戦ざるふ中國勢。殊ふ智勇の誉ある。右門小早川の両名
將。従士もそれく豪傑なるに。羽柴ゞ武名の鋭さふ恐怖し。新
要衝を構へしふ。強ふ理とそ知きしる。然かどふ羽柴流石秀吉ハ。
書写山上ふ在陣して。別所退治成議なる頃。毛利三家の十一万餘
猪。海陸両道より推進せく。上月城を攻るふ。急を告るを國人衆
反心の色顕さをるまで。黒田官兵衛湯羽柴ふ向ひ。服部別所の
歟なるうへふ。毛利の大軍上月ふ推進。その勢威ふ怖なし。反
心の色顕さをれば。信長公ハ所加勢を預えを。軍勢ふ陣もるま
でハ。書写山陣を堅くもりく。内外のふんしをといく。秀吉聞て歟も
理なりといへども。尼子主従義をもりて。上月城を持堅へり。歟来り

秀吉
高倉山ふ
躍
毛利
三家の陣營を
眺望し

卍

なバ敵ふ度ハ須ての約束なるべし。方便此注伸を聞なゞら。
所時も猶須ちるハ不義なり。即時小尼子を援ふべし。左右の不義もあ
るまじ。出陣の准備せられよと稟ちる黒田もあやぶこながら。はる
同じて准備せり。鉄ゑ小羽柴が將佐といふハ腹心一万二千五百ふ黒田
孝高。別所重棟遠隔を合せて一万四千四五百。そのうち三千張人を
分く。所中宮内少輔重治小輿へ別百孫右衛門ゑ二千餘人を相副て三
木城の敵を厳守させ。安土へもまゝ駒馬ゑ乗ゑ力勢のこと。ゑ
まのうし。秀吉ゑ黒田ゑ魁ゑ一万二千の兵士ゑ率ひ。上月境
へ發向なゝる。倉山に陣揉ゑ。遠地ハ西南一面ふ流覧ちべき勝
地なれバ。秀吉陣前ふ紀出ゑ。毛利の陣ゑ見覧ちふ山ふ接川
ゑ陽地理を設けゑ陣を列ふ。其堅固ゑ城堡の像ゑ。猶てや七百

の大軍なれバ。堅甲利兵と謂つ度ゑ。爰時暗めて立たゑ度ゑ敵
の氣ゑ拉ぐんと。倉山の絶頂へ他の視察ゑ五色の吹貫金の瓢
ゑ馬幟を。勢強と推標させ。秀吉一隊の勢ゑ列ゑ。後援に向ひゑと
敵陣へ明白に知ゑ。浮田の軍ゑ是を見て。備ハ秀吉後援せし
ぞと云年の合戦ゑ懲ゑ。其勇猛ふ懼怖羽柴ゑ度ゑ。
ゑ。見ると。ゑ来強動ちなきバ。之吉平賀小早川の先陣の勢もこれふ倣ふ
秀吉ぞと動忙ゑ次第に備へゑ。惣陣中方便も敵の進来ゑ如ゑ
ふ強ふと聞きなるゆゑ。元春隆家大ふ制ゑ。粥くこれゑ法めたゑ
旦又上月の城中にも。天色の風幟ゑ倉山ふ翻ゑたる様ゑ眺ひ。
まもゑ守城法よろゑなれバ。陽ゑ見ゑ。ゑ中國勢も秀
吉の小勢を更ふ侮らゑ。合戦ちべき氣色もなゑなれバ。秀吉ハ猶陣を

堅ふ〜安土の加勢を待たそう。然るふ羽柴ゞ馳馬ハ。安土の城へ池ゑ
さく。毛利の大軍出張ゑ〜。事急ゑるゝ中〜城若くうしゑ。御自身御出
馬のおゞ〜めゝして。慈本掛津ゑ村重ふ。魁軍を命屬らをたり。遠
晌ゑ本村重ハ信長伐。怒む思枝あつまく。謀反の心萌ゑるゑ。いまゝ決
心せざりけをバ。命ふ逆ゝさく向ふといへども力伐竭をこ絶もなく。一万
餘騎を引率ゑ〜。攝摩ふ下ゑ即便ゑゑ金山へ出陣せ〜ゑ。秀
吉大ふ喜悦ゑ。一戦をゑ〜と高議ゑ。ゑゑ〜ゑ村重これ伐堅く制し。
戰ふ勢逆更にゑく。横怨る心ゆるゑ。其逆自然とゆ〜〜れ〜ゑ。秀
吉発くもこを伐察悟〜。遠者劉才偽謀反せゑ。審ふ緯〜〜紀
大事ゑりと日夜安遠のおもひゑく。脅吉をゑりく村重伐除ゑる
除々ゑ練熟ゑ意を和々んと謀りゑる。左右ゑ今日も明日とゑるまゝ。

加勢次第ふ到来ゑ。池川左ゑ将堅一益惟任日向守光秀。筒井順
慶伊賀ゑ。こをを一陣ふ遣ゑ。第三番にハ中将信忠。北畠信雄神
戸信孝。惟住ゑ丹左ゑ長秀。佐久間右衛門信盛。細川ゑ藤孝
長岡藤孝是也。武家左京亮朴全の孝是也。安藤伊賀守。蜂谷ゑ庫頭等一万五千餘人
日毎〜〜ふ下向〜〜。六月六日より十日まゑの間ゑ其勢七万七千餘騎。今ハ毛利と対戦まて
ゑ。格別ゑる軍勢ゑ〜〜ゑ。遠ふ雑義ハ惟任光秀。佐久間瀧川を
ゑ〜めゑて。秀吉ゑ指揮ふ隨ゑ〜〜。自己ゑ隨意挙止ゑるゑ。新ゑくハ
わ〜ゝと秀吉ゑ夫〜。左右大将信長公御ゑ向ゑくんハ。鼎議決ゑ遠
にこれ伐料理ゑんと光秀をゑ〜〜ゑく三本の城を行中ふ換ゑて厳守ゑ
せ。重治を怪んで密使ゑ〜。安土へ使者ふ遣ゑ〜ゑるゑ。内府快ゑり
中国攻伐。御意ゑりとゑくあゞせ〜機會ゑゑ。早速ゑ清を呼出さ

し。中国の虚実を御窺ある。重治これを聞て（まづそのとき）別所が謀反の叛より毛利の三家出張の事。加勢の諸将我意あるも係精しくこれど京師の足遠上ハ大将みづから御出馬ありて御指揮あらしくださらバ秀吉先陣仕りまつり。中国勢を追崩さんこと。最易かるべしと。深く我内府聞しめし。實ニ當理の訴なり。速に遅延征伐あるべき評なり。猶豫あるべきにあらざれバ早速河内より出馬なさるべし。まづそのまゝすぐに先へ下せし。信忠をもつて主将となし秀吉万事其料理あるべしと命せら重治これを謹拝。別辞を遍て被帰りぬ。然るに中将信忠ハ播磨より向ふといへども書寫山中へ御入あるべきを舎山へ出張せしめ。秀吉これを催促し給ひ。長秀をもて加へらる。かゝる所へ竹中半兵衛安云の撤より逝去ふ内府の発意を傳へたりけるぞ。秀吉聞て然ハ

ことに我も快よりて其意なきバ。信忠公の出張を志なく動かまぬ。されども。元より我兼保しまさいふに竹中動しこ。然らバ乃更書寫へ参り。中将殿へ言状せんとて即時に山中へ参向し。謁して要とれ虚実を演畢て君遠山中にましまさんより上月境へ御出馬あらぞ。自軍の威勢壮になり。諸勢も懸をはなんと勧めまゐらせ是を聞しめし。是も然こそとおもへども。三木の敵徒も容易かうね搦上月ニ終えもつつ。偏別所方突發なし。自軍ハ後を寛りなバ難危からんとおもひぐ如く。書寫山中を動かざるなり。是又上月へ出張せず自軍ハ定めて催促をへし。是父の制しあるに従ふを東西状かかりなく出馬を止むと命せなに宋な請ひや深く惜し備ハ嫉妬偏執なる。光秀術が妨なんと蒔び論せし。退出しけり。實ハ重治が

情愛ふ遠くて偏執深き惟任光秀。其子ハ丹波征伐の君命を快に承りなが〻。いまゞ其功更ふ遠せゞ。遠遷秀吉毛利家と一戦ゐして遠嶺さへ終ふハ中國をも攻鎮めんふ為ときれば我不志使とるらん。万乞羽柴が功をたやうにど密ふ計つまく佐久間瀧川神戸北島を殺さ〻。信忠公まく。非を理ふ曲く。逆況ふ光秀ことれ丹人〻光秀が辯舌に惑されう。其計久ハ中將殺を勧めまゐ〻せ。内府の出馬を。止めタ人と恵練しけ者を。伝忠密使を安土へ〻らせ。遠近伐岩ふよう。意計ゐや信長公の御下向もまこ羅こう〻とゞ

山中まで盛先達て明智伐ふん〻舟波を
ふく羽柴が方ふ廣ゞ〻ふ光秀が眼の一也

毛利家與羽柴戰然見川屬福鴻大勇

春夏ハよく魚鼈を綱し。秋冬ハよく禽獸伐器を其時ふ和〻ゞれば

漁獵多〻ことあるとゞ。遠ふ毛利家織田勢と一戦叢動まるといえども心遠ふ怠むがあるふ。事大なるに及ばゞ。既ふ光秀新計もく。内府ハ出馬伐まで止〻ゞ六月央ふ至るといえども。ゐんの沙法もゆゝしゞて。徒〻〻對陣ゐるのをみり。然るふ六月十七日の事ゐしが。ゐ金山ハ本腰ふ隊伍を列行〻瀧川佐久間。氏家傍が陣の狭章ゞ酸暑のことゐ。累朝ふ。禁に流るゞ鮪見川ふく。馬の四足を冷〻ゐ伐。中國勢の惰雄。これを殿人と諜合せ。その陽意ゐる。柳堤行林ふ堰伏〻て四五百人をかり爾ゞひ在ゐるゞ。今紀〻も佐久間氏家ゞ狭章ゞ。丹六十人河過ふ到る。数多の馬伐中流ふ。漫〻て足を補こ色。狭章ゞ塗湍ふ起よゞ。て。顔面ゐゞ法ふ機金こそ伐色。毛利の伏兵ゐ百餘人。章然〻て發起。ゐ統一吐ふ法ゐゞ。菟ゞ狭章忽地ふ十

中國の魁隊
埋伏しゝく
織田の面軍
瀧川佐久間ゲ
牧卒を
毆惱す

人をかり。驚倒されく驚顛ゐし。逸逸さんと志々ゐふたゝや。敵を諸葛を
防塞死。利をまゝ〜とそ起相ける。氏家左京亮これを見て。眼前自軍
の殿るを。つゝ敷ふるゆゝやゐる。先敵を退散せと一千餘騎ふくゝ山を
下る。中國勢ふ擊て蒐出を。右門ポ早川が陣中ゐるゝ。ゝゝゝ合戦ゝ
じまりたるゝ。ゝゝや征若くゐる名せよと。枚原播磨ち。同孫八郎同又一
郎父子三個。右田肥後ち。完戸又郎兵衛。香川兵部大輔。表服
市郎右衛門。新見左衛門尉。中國五双の勇士達。一万四五千地来れ
ば。織田方よりも。佐久間瀬川。安藤尚井の諸大將。氏家を殿ゐゐた
や蒐出とこれも一万四五千ばり。喊をたくりて突戰ゝ〜るゞ。地理
自在ゐる中國勢。横を擊。後を襲ひ。逓ふ自軍伐技合ふく。進退
ゝ〜ゐ隨ゐりけるふゝ。織田勢忽地蒐起らゝ。蘖の方へ退け。伐。

中國勢ハ猶ふ素。南條小路の勢を加へく。退殿ゐること錯ゐり。遠駒
將柴秀右ハ蒐木村重が陣ふゐき。軍漢伐ゐくゐりくるゞ。新を所て右
木ふ向ひ自軍五法の軍を做殺し。交系ゐ〜とかゝえり。乃夫自勢
を操ゐさば。敵悪く進来ゐべゝ〜。其駒こそハ足ゝの一軍。遠山上ゐり五
逆般ふ目下の陣所へ駐蒐されよゐるゝ。勝利とゐるべきよ。ふくゝ計り
ふゝといふを。村重所く義諦ゐし。機を敵く変に意びべし。と約を新
ゐて別ゐてゐり。然ゐふ羽柴ゞ隊の中ゐる。中村孫平二自勢を率ひく
蘖ふゝゝ。中國勢の横隙より。電光の像く地投く。孫平二ゐ川ゐ猶
さゝのゐ。先猶を二三猶突蒐ゝ。其威に乗じて征起てくれば。神ゐ
田宋左衛門。宮部善位房。猶前守ゞ帰りも伐ゞ。孫平二伐接ゐんと一
渡ふ蘖へ地ゝり。南條小路ゞ二千餘騎の。横隙に征徹ゐ。忽然ゐゐく

掛記けまへ。中村孫平次力戦得くまもなく。接戦猛烈なり。遠藤喜右衛門
ふ帰り。魁兵の怒奮せ戦視て。旗本の勢一万餘騎を車蒐ふ陳位さ
せ。又遠の風懐疏の恢懐。正魁ふ推を後くと。鑁ふ下りく進右敵戦位
歩ふ合せく攝出。自軍の諸軍を懲まる。彷徨しる毛利勢の中へ二
時ふ推蒐る不へ欲方にも。治部少輔元長吉川元春の嗣子也民部少輔元信毛利輝元の孫
氣強勢の虎達なまを。こづうう馬戦延出し。枝原父子が軍中ふ加へり。
激勇なして戦ひ。なるが。表腸。番門。宛戸の族ハ。武勇名誉の剛兵なれば
秀右の旗本と。ならるも。頼ふ不の歓なりと。氏家。佐久間を打弄て。
貪秀右が隊へ延朝ふ。羽柴が勢の中へりも。加藤虎之助。同孫六同仮
内。福島市松。序相助仮。堀尾茂助。脇坂甚内。粉谷助右衛門。平野権平。
蒲堂。糸右衛門。一柳市助。徴。備ふ憤甲怒強して。先俺们が猛威の量戦。

中国武士ふ。ちっさ志めんと。奔虎跳龍のさ為を。ふし。突と喚く。掛蒐り。表
脇。番門を。縦横を。駆ふ割裂しなまを。これふ歓する兵士ハなく。系戦閑ひ
く通さしむ。中村。仲子田。宮部。塚須賀。これ。績ひく延記ける。西表中国
勢も。足戦。清うも。孔。延さて。敗走せんとも。吉川元春。聲を。励まり。恥を
知まや。名戦。稼ちる。諸堪へよと。指揮するかどふ。枝原父子。番門。表脇。名
自勢を。取て。返し。微塵ふ。なるとも。動さらせしと。奔走をりちさたまへば
上方勢。左右なくハ。突崩さてこと。敵さして。馬を。動へく。息戦。延時
小早川。隆景。吉川元春も。嬰便の軍。なれば。こづうう。枝原。父子を。左右さ
えめんとその。進。戦。なるが。延陣中へり。程近き。山の頂上へ。元木
が軍兵。一万。だうう。怒くと。遠方戦視。沉へ。動へ。立る。西表。元春さかへ。紀
大将なれば。倘。行。費。るその。ひと。那方の。歓兵。逆。為へて。我陣中へ。撃

熊見川崩ふ
福島主従
大膳をめて
敵の首
を捉

投べ。自軍敗軍にかゝるぶ爲〜。紛合さべ〜とく退潔ゆゑ。軍を收め
よと命じ〻るふぞ。元長元信もこれふ隨ひ。退揚んとすといへども。退
殿の事亂煩〜〻まべ。退治かとく雜兎なりしを。松系父子距後〜て。
一千餘人魚鱗ふ隊伍。敵ふ向ふく勒へてり。這際ふ元長元信後諸
勢を纒めく退き〻る。羽柴ゲ勇士後られ視く。追殿せんと推出せし
ゲ。秀吉制〜く退きめさる代。福治市松只一騎。急ふ追蒐南条ふ
鴨の後走て行を退殿んと大喝一聲掛く蒐さべ。南条ゲ老臺来石
ふを帝。取く返〜て福治ふ砕く蒐る代得とりやどこ合ゲど戦ひ
しゲ。速くも来石を掛伏しう。浩る所ふ秀吉大急ふ。退返さべ〜と指
揮ちゝまべ。福治正則ゲ從兵雀。おとふ法く自軍をけさべ。遂に身と
練めける代。正則左右を顧て。我のく追殿ふ進さゲ〜ちるべ代首を

とうも捉らゞ。退うんと謂甲斐ゲ〜。方僅掛止しる歌兵の職をりと
もせやく殿捉ゑ〜と取て返さ代松系父子。憤然として動へるもゑ。
福治ゲ家人を不諦めく〜ゞふ首代をとり得んとく。老を搖動〜
ゑふをと制〜止むまど正則用ひゞ我掛止〜歌の職を我又殿に繹
妨へ〜と些も怖まゞ走ゑ代。里野又左帝とく。福治ゲ股肱の老
臺ゆりけるゲ大勇猛の武士なれべ。共ふ絶行。主人の後頸ふ那羅
延神の像く着優〜歌近傍ば目にりの見んせんと眼を怒〜〻を
よりしゑべ妨げんとする歌もゆく。正則首尾よく職ゆ捉ゑ。主從相伴
返せ〜ゆ。大膳不歌の所作ゑ

繪本豊臣勲功記四編巻之九終